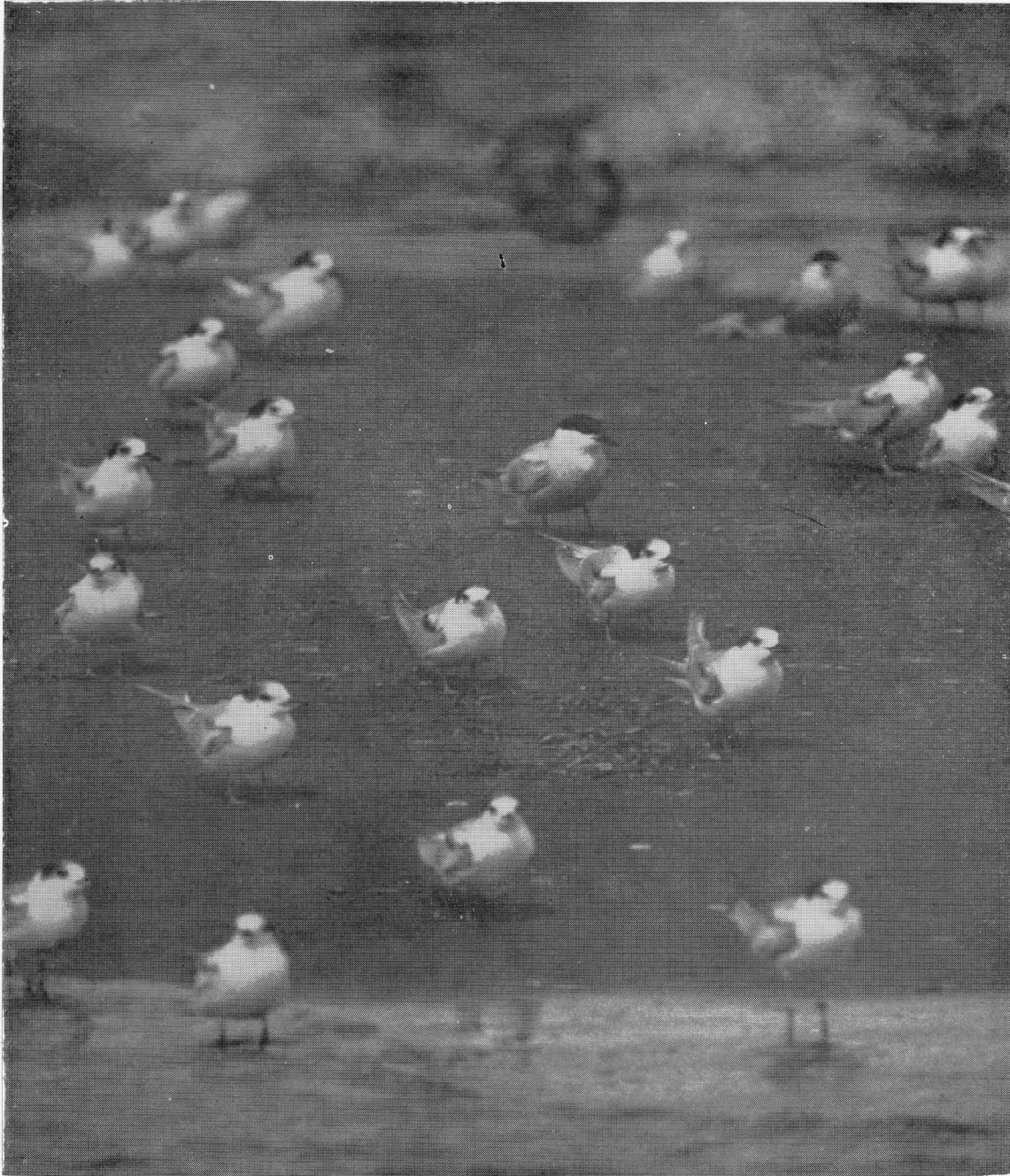


野鳥たより

—北海道—

第 15 号

編集者 北海道野鳥愛護会
発行者 北海道国土緑化推進委員会
発行日 昭和48年8月
5月・8月・11月・2月 年4回発行



アジサシの群 昭和47年9月15日 石狩川川口にて 撮影 萩 千 賀



活動をはじめた

観測ステーション

環境庁が昨年からの建設中であった渡り鳥観測ステーションが完成し、今春から調査が開始されているので、この機会にステーションをめぐる動きをまとめておこう。

■渡り鳥観測ステーションとは

渡り鳥観測ステーションとは、鳥の生態を知るために標識調査や生態観察を実施し、これらのデータを国際的に交換して、国境を越えて旅をする渡り鳥の積極的な保護対策をたてるための調査の基地である。

環境庁が整備しようとしているステーションは全国で30カ所であり、これはその場所の重要性やつくられる施設の規模によって、1級ステーションと2級ステーションに分けられている。

計画初年度の47年には、新潟県の福島潟をはじめ、全国数カ所に整備されたが、このうち北海道には浜頓別町（クッチャロ湖）と豊富町（サロベツ）が対象地となった。

浜頓別町に建設された1級ステーションは、湖を見下す丘の上にある。木造2階建、建築面積53㎡のしょうやかな建物で、作業室、居住室、器材庫等のスペースを備えている。また、豊富町に建設された2級ステーションは、稚内内の砂丘林の近くに建てられた。浜頓別のものより規模は小さく、木造平家33㎡で、作業室と居住室を含むものである。

これらの場所での調査は、国（環境庁）が山階鳥類研究所に委託して行なわれている。そして、調査員には山階鳥研の研究員のほか、美唄農工短大の正富宏之教授をはじめとする在道研究者等も参加しているのである。

ところで、観測ステーションで行なわれる調査の主体

は、標識調査（バンディング）である。これは、鳥を無傷のまま捕え、足にアルミ製の足環をはめて放鳥するものである。

足環にはすべて国籍と番号が彫りこまれており、台帳に鳥の種類、性別、年齢、放鳥した年月日、場所を記入しておく。すると、後になって足環をつけた鳥が調査や狩猟等によって再び捕えられたとき、足環の番号を台帳と照合してその鳥の移動経路や移動の時期、寿命などさまざまなデータが得られることになるのである。

■ステーション建設の背景

渡り鳥観測ステーションが設置されるに至った背景には、昨年3月に締結された日米渡り鳥条約があることはいうまでもない。

日米渡り鳥条約——正式には「渡り鳥及び絶滅のおそれのある鳥類並びにその環境の保護に関する日本国政府とアメリカ合衆国政府との間の条約」という——は、その名前のように渡り鳥と、絶滅に頻する鳥の保護を目的とする条約である。全文は9条から成る短いものであるが、内容は(1)科学的な目的や狩猟期間中等一定の場合のほか、日米間の渡り鳥の捕獲は禁止され、不法に捕獲された渡り鳥やその加工品の販売等も禁止される。(2)絶滅のおそれのある鳥類やその加工品の輸出入が規制される。(3)渡り鳥や絶滅のおそれのある鳥類の環境をまもるための措置をとる。(4)研究資料等を交換する。というような包括的なものである。そして、日米両国間の渡り鳥として189種の鳥が掲げられている。

このような鳥類保護のための国際条約は、欧米ではいくつもの実例があり、その歴史も決して新しいものでは



一級観測ステーション
(浜頓別町)

ない。また日米条約にしても、昭和35年にはすでに米国から申し入れがあり、昭和43年ごろから専門家会議を繰返して内容を検討を続け、昨春の締結に至ったものである。わが国はこの日米条約に続きソ連と渡り鳥条約を結ぶべく交渉を行っており、大筋の内容ではすでに合意に達している。また将来は中国、オーストラリアなどとも条約を結ぶ意向を表明している。

■国際的に負う渡り鳥保護の義務

日米渡り鳥条約の締結によって、わが国は国際的にも渡り鳥保護の義務を負うことになった。しかし日本の保護対策は英米等に比較してかなり遅れているため、発足早々の環境庁はいくつかの措置を急いでとることになった。

たとえば、さきに記した標識調査についてみると、日本で1年間に標識をつけられる鳥の数は8,000羽ほどでしかないが、これは数万羽も行なっているという東南アジア諸国にもはるかに劣り、100万羽も行なっているという米国と較べたら問題にならない数である。

渡り鳥観測ステーションの設置は、このような遅れをとり戻すために行なわれることになった施策のひとつなのである。

■干潟の調査なども

その他、渡り鳥の繁殖地や渡来地として重要な離島や干潟の調査も、昭和47年度から着手され、今年度も引き続き行なわれている。

まず、離島の調査については、海鳥類には孤立した島の岩壁などに大集団で生活するものが多いが、これら小さな島は環境の変化に対する抵抗力が小さいため、これらの島の鳥とその環境を調査し、保護対策の必要を探ることになったのである。これは環境庁の委託事業として日本野鳥の会によって調査が行なわれ、本道では太平洋岸のユルリ・モユルリ島と大黒島、日本海岸の天売島と松前小島が対象となった。

次に干潟の調査については、シギ・チドリ類をはじめ多くの鳥たちの採食地や休息地としてたいせつな干潟の保護をはかるために行なわれた。

干潟は内湾や大きな川の川口に発達する泥湿地で特有の生物相をもっている。しかし干潟は遠浅で埋立てが容易であるうえ、多くは大都市の近くにおいて都市化・工業化の影響を正面から受けたため、渡り鳥の渡来地として知られていた大きな干潟は、すでにほとんどが大きく変貌し、あるものは消滅した。北海道には、東京湾や大阪湾等にかってあったものほど大きな干潟はもととな

いが、昨年は石狩川と鶴川の川口が、今年は能取湖、瀧沸湖、風蓮湖の干潟が対象となり、日本鳥類保護連盟が環境庁の委託を受けて調査を行なった。

さらに、法的には「特殊鳥類の譲渡等の規制に関する法律」が制定され、今春から施行された。これは、絶滅のおそれのある稀少鳥類について、譲渡や譲受け等を規制し、また輸出入を原則として禁止することにしたものである。

法律の対象となる特殊鳥類には、タンチョウ、エゾシマフクロウ、エゾミユビゲラ等の本道関係の鳥をはじめカラフトアオアシシギ、シジュウカラガン等の稀な渡り鳥、ノグチゲラ等の沖縄特産の鳥その他が定められている。

■期待される今後の発展

欧米各国に比較して遅れているといわれていたわが国の鳥獣保護行政も、このように昭和47年度をひとつの跳躍台として、かなりの前進をみせたといえるであろう。予算面でも、環境庁の鳥獣保護関係予算は、この年には対前年比7倍余に達したのである。

しかし、観測ステーションができて、それがうまく活用され、成果をあげるかどうかは結局運営の方法如何によるであろう。また、基礎的な調査は科学的な鳥獣保護対策をたてるためになくしてはならないものであるが、調査によって得られたデータが適切に行政に反映されるかどうかは、ひとり鳥獣行政のみの問題ではなく、政治全体の流れや社会の動きによって方向づけられることはもちろんである。観測ステーションの活動を契機として鳥獣保護活動の今後の発展を期待したい。



(上) 石狩川川口の調査
(下) 鶴川川口の干潟 (47年夏)

伐り倒された朽木

小山 政 弘

千歳市の市街地南端には、青葉公園と呼ばれる50haほどの林がある。第二次大戦前には、御料林指定とかで草木の採取は固く禁じられ、豊かな林相であった、この土地に詳しい人々はいう。戦後、米軍の駐留で風紀が乱れると相もなあって、この林も次第に荒れはじめた。つい数年前にも、青少年の非行化防止策とやらで、下草や低灌木類がほとんど刈り払われ、ますます貧相な林になってしまった。

ところが、こんな林にも、アカショウビンが営巣する一本の朽木があった。しかも、自動車や人が通り過ぎる林道ぶちに立つミズナラの朽幹なのである。

一昨年、高校生・中学生らが中心となって「千歳野鳥の会」という小さなグループが誕生したが、6月下旬に抱卵中のアカショウビンを確認して以来、会員たちは観察のために日参した。観察の際には、付近を通る歩行者や小さな子供達に気づかれないようにと心を配って双眼鏡をのぞいたものだ。この営巣記録は、「千歳市に生息する野鳥（第1報）」にまとめることができた。昨年、井上元則先生が上梓された「北国の自然と野鳥」の表紙になった、野村梧郎氏撮影のアカショウビンも、実は同氏がこの青葉公園に来られ、およそ3時間もねばってものにした写真である。



私たちが営巣観察をした翌年、つまり昨年も、前年にひきつづいて同じ幹の同じ樹洞でアカショウビンの姿をみることができた。入江智一、義智の兄弟は、野村氏の

写真よりも少しでもすぐれた生態写真を追求し、前年の観察を補うために幾度も足を運んだ。あいにくの天候不順が災いしてか、その年の営巣は失敗に終わったらしい。千歳野鳥の会の会員たちは、「来年」に大きな希望を托して、空になったそのアカショウビンの巣のある朽木を見守っていたものである。

このミズナラの朽木が伐り倒されたのは、それから4カ月後であった。

公園内にある運動競技施設がカミナリ族によって壊されたり、道ゆく散策者達がカミナリ族におびやかされるものだから市が公園内の車両規制に着手したのである。やると決れば早いものだ。なんといってもお役所だから力もある。すでにメインストリートになった幅広い運動競技施設までの林道を愚かにも封鎖したかと思えば、林内では最もよい林相が保たれ、アカショウビン営巣の沢を通る林道をブルドーザーで拡張したもんだ。見るからに貧相なミズナラの朽木などは、まるでゴミ同然だ。他の樹木数本とともに倒されてしまった。

これには地元新聞も腹をたて、「ひとこと野鳥の会などの声を聴くべきであった。」と市役所を批難した。

そして今年。いくら待っても、あの美しいアカショウビンの声と姿はとうとう認められなかった。会員の一人は、千歳川上流で声だけを確認したという。

シンナー遊びの場所になるからという理由で公園の下草・灌木刈りをやり、危険な穴を埋めるという理由で公園内に下水のヘドロを捨て、公園内の車両規制という理由で林道を拡張する。いかにも田舎市役所のやりそうなことだ。昨年、全道に先がけて千歳市では緑化推進ナントカ条令がつくられた。有志を集めて市内に植樹をするのだそうだ。太古から生き続けてきた複雑でかけがえのない自然林を平気で壊しておきながら、緑化推進などキレイなことばを使う厚顔は、私たちの選んだ為政者の真の顔なのだろう。

このアカショウビン営巣の朽木が市役所によって倒されたことは、現在のわが国の自然保護行政の象徴的なできごととして受けとれはしまいか。大雪山縦貫道路の建設、風蓮湖周辺の開発等、私たちは、野鳥愛好家としてこれらの迫りくる大きな反自然保護行為をただ見送るようなことをしてはいけない。

(恵庭中学校教諭)

トビ哀れ、ウトウ悲し

高橋 明 雄

1973年4月28日の午後、増毛町暑寒沢の採石場附近でトビがダンプカーにひかれる事故があった。餌をくわえてとびたつところを、ノルマに追われて疾走するダンプがはねてしまったのである。

翼長48cm、尾長29cm、嘴峰3.4cm、片羽根をひろげると70cmにも及ぶが、左翼は完全に折れて骨が露出、両足もたたない。事務所の裏に捨てられる労務者の残飯を食べにきて、この災難に会ったものであろう。

海岸にカラス・トビの仲間が多いのは当然だが、昔のようにたくさんの雑魚が浜辺に落ちているようなことはないから、彼等も索餌場を広く求めなければならない。水産加工場の廃棄物、町営塵芥処理場などを徘徊している。

増毛線で留萌へ向うと、瀬越浜の上空にはゴミも混った彼等の姿を見ることもある。消費文化水準の向上で発展した珍味加工場由来する、この沿岸の特徴的光景でもあろう。

ダンプのスピードもはからずに、悠々と離陸したのが一生の不覚であった。気の毒だが助かるまい、死んだら剝製にして蘇えらせてやろう……と、そのまま譲り受けたN氏が、やっこらさと自宅へ運び込んだところ、娘たちが「可哀想だよ、お父さん、剝製にするなんて」と、さっそく薬をぬって治療したり、ソーセージを刻んで食べさせたり。

愛情が通じてか、トンビ君の体力は次第に回復し歩けるようになったが、残念ながら左翼は折れたところから腐って落ちてしまった。

片羽根飛行という器用な真似もできず、さりとて人間ごときに慣れなれしい態度もとれず、猛禽類の名がすたってはと相変わらず、給餌者へは威圧的な仕草をとりながら、魚の内臓などをパクついている。

せっかく用意した亜硫酸や義眼も役にたたず、娘たちの抵抗は大きい、それに羽根が一方ない鳥の剝製ではしようがない。

食欲旺盛なトビ君をみながら、さすがのN氏も頓首。

中歌海岸に海鳥の死体がたくさんおちている……という情報が入ったので、6月16日の午後カメラを持ってかけつけた。「すわ、公害かノ沖に油でも流れているのでは？」と思ったのである。

なるほど、汀に点々とむくろをさらしているのは、俗称カモと呼ぶウトウ（うみすずめ科）であった。集めて

みたら25羽、他に2カ所ほど焚き火の跡があって、黒焦げ死体が幾つも出てきたりする。

ひきずり出して調べていたら、背後から太い声をした。



汀にすてられたウトウ

集めて焼きすてられたウトウ



「おい、大将！鳥の写真などにとってどうする気だ！」陽焼けした男である。要するに彼は、この鳥が公害で死んだのではないことを力説するために寄ってきたのである。海の汚染で鳥が死んだ、などと新聞にたたかれたりしたら、増毛の魚の売れ行きが悪くなると考えたのかも知れない。

真相はこうである。

カレイ刺網漁に出て、網を揚げるとウトウが網の目に首を突込んで死んでいるのだという。首も羽根も団子になっているのだそうだが、魚を追って入って行くのであろう。

時化が続けば幾日も網を揚げることはできない。彼等が助かる訳もないのである。

ちなみに網の深さをたずねたら、クロガシラ漁で15～16尋、マガレイ漁で40尋にも及ぶとか。1尋を150cmとすれば前者で23m、後者で60m位になる。

そんなに深いところまでもぐって、水圧の関係などは大丈夫なのだろうか。驚いたものである。

これまでは、あまりこの種のニュースをきかなかったが、無論、浅い所へ網を張ったときはウトウの被害が大きいのであろう。

悲しきはウトウの習性……であるが、カレイ刺網漁が続く限り、絶えることはあるまい。（増毛町在住）

続々・ヤマセミの観察

入江 智一

ヤマセミの観察記録をこの場に発表するのも3回目になります。11月30日の観察の後少しばかり間をおいて、1月28日からまたヤマセミの観察を始めましたが、3月29日の観察を最後に、ヤマセミは飛来しなくなっています。今までヤマセミの観察発表を続けてきて、ヤマセミの飛来する時刻は日の出の時刻に関係が深いことは、今までの飛来時刻表を見るとほぼ明らかと思われることです。

11月30日～1月28日の間、ヤマセミの観察に行っていない間にヤマセミの行動に著しい変化が見られました。その第1に、ヤマセミが飛来するとき、決まるとまる木にはとまらなくなって、別の木の枝にとまるようになっていました。第2に、前回までの観察で、ヤマセミの成鳥が飛来してからその次に幼鳥が飛来することとか、または成鳥・幼鳥がいっしょに飛来するのが普通だったのですが、1月28日以後の観察からその逆のような現象が見られ、幼鳥が成鳥より先に飛来することとか、幼鳥だけが飛来することが多くなっています。第3に、前回までの観察ではヤマセミの飛来するときに嘴に餌をくわえて飛来したのを観察したことは、まったくありませんでしたが、1月下旬ごろヤマセミの成鳥が2回、嘴に餌らしいものをくわえて飛来したのを確認しています。今までヤマセミの観察を続けてきて、ヤマセミがなぜ冬季だけ川の下流の方に飛来してくるのか？決まった時間、決まった場所、決まった木の枝にくるのかまだ疑問が残っています。

3月29日を境にヤマセミの姿は見られなくなりましたが、6月4日の朝早くに野鳥観察に出て、千歳川の上流

の方（冬季のヤマセミ飛来地より1～2km上流）にいったときに、7時45分、私の立っていたところから30m上流の腐った切り株の上にヤマセミの雄の幼鳥が鳴きながら飛んできてとまりました。しばらくぶりに見るヤマセミは一際眩しく見えました。それから約1～2分ほどしてから水面にダイビングをして上流の方に飛んでいってしまいましたが、冬季に見たヤマセミとは少しようすがちがっていて、胸の栗色の斑点が少し現われていて、体も一回り大きくなっていました。

また9月ごろになるとヤマセミが例年のように飛来することと思いますが、川が毎年毎年汚されていくこの頃では、川の水の汚染度を示すといわれる、カワセミ、ヤマセミが、あと何年この千歳川にきてくれるか気がかりです。カワセミ、ヤマセミなどいろいろな野鳥が毎年姿を見せてほしいものです。

ヤマセミの飛来時刻 (1973)

月日	飛来時刻	飛び去った時刻	備考
1月28日	前6:44	—	2羽
1月31日	前6:54	—	2羽
2月2日	前6:25	—	1羽
2月3日	前6:20	前7:30	1羽
2月4日	前6:45	—	1羽
2月11日	前6:25	—	2羽
3月4日	前5:50	—	2羽
3月7日	前5:39	—	1羽
3月9日	前5:20	—	1羽
3月17日	前5:15	—	1羽
3月29日	前5:05	前5:05	1羽

(千歳高校3年)

クイズ

出題・藤巻裕蔵

これは、ある新聞にのっていたシラサギの絵です。絵をよく見てください。鳥の体つきに変なところがありませんか。

なにか変だと思えば70点、

どこが変だかわかれば80点、

おかしいところを正確になおすことができれば100点です。

(答は12ページ)



カラス

平 林 道 夫

北海道を旅行した内地の人と話をしていると、よく北海道にはカラスが多いという話題がでできます。私自身にもそのような印象が深く、昭和7年頃初めて北海道旅行をしたとき、定山渓や登別の温泉街にはまるで内地のスズメと同じように、家々の軒先や道ばたにカラスをたくさん見かけたものです。その頃札幌市内でも同じようにたくさんのカラスが住んでいたらしく、冬の夕方などは円山上空はカラスの群で空が暗くなるほどで、円山付近の人達は円山をカラス山と呼んでいたそうです。今でも札幌市内には約4,000羽のカラスが生息しているだろうと、道では推測しておられます。

カラスはその風体、色、鳴声と、どれをとってもあまり感心したものはなく、野鳥といっても可愛らしさが少なく、それに鳥の仲間としてはなかなか智慧があるせいか、むしろきらわれ者になっているようです。とくに近年は各地でカラス公害などといわれる小事件を起して新聞記事にされておりますが、戦時中飛行場の近くに住むカラスの中には戦闘機の真似をして宙返りをする愛嬌者もおりましたし、また最近道の衛生研究所が環境汚染調査の対象としてカラスをとりあげ、環境汚染の生体影響試験を行なっているとかですから、カラスも人間様に大いに役立っていることとなります。

ところで、現在各地で起っているカラス公害ですが、もとはカラスが繁殖しすぎた結果ではないかと思われます。繁殖しすぎということは、それだけ餌が多いからではないでしょうか。都会近くに住むカラスの餌の多くは人間が出すゴミだといわれております。都会の人がところどころにゴミを捨ておいて、カラスがうるさいとはあまりにも勝手な話です。カラス退治をする前にまずゴミの処理をうまくするとか、各人がなるべくゴミをたくさん出さないように心がければ、カラスの餌が不足し、自理の摂理に従って数も減少するでしょう。わが子を守るために人を襲う親ガラスなどは退治するどころか、逆に母性愛の鑑と表彰されるべきです。

次にカラスの珍しい行動を目撃した記録を付記しておきます。

古い話ですが日付は正確で、昭和4年12月26日の夕方のことです。場所は伊豆半島の西海岸、土肥から松崎に向う道路で、山道が松崎の海岸に降りようとするところでした。なにしろ40数年も前のことですから現在ではその付近の様子は全く変化してしまっていることでしょう。当時土肥から先は車も通らない細い山道でした。付

近の丘の上の樹々にたくさんのカラスがいるのに気がつききました。どの木の枝にも数羽づついて、時々木から木に1羽づつが往来しています。しかもひととき大きな松の大木にはカラスが鈴なりで、ちょうどそれが中心のように見え、そこから何か伝令が発せられているように思えました。ところが山道から海岸が見降ろせるところまで来て、さらに驚いた光景に接しました。小さな砂浜でしたが、その半分がカラスで埋って真黒です、その上その中心部には土俵のように円形に砂浜が残っていて、その中心には4~5羽のカラスが頭を寄せ合っているではありませんか。そればかりではありません、ときどきその中央から1羽が飛び立って山の松の大木との間を往復したりしています。あとから思うのにどうも浜のカラスはハシブトで、山のカラスはハシボソであったような気がします。人間から見れば明らかに浜のカラスと山のカラスの協定会議と見えたのですが、同じカラスでも異種間でこのようなことがあるのかどうか、つい最近まで疑問に思っておりました。ところが去る6月4日付毎日新聞朝刊に「東京カラスは3千羽」という見出しの記事の中に、山階鳥類研究所の黒田研究部長さんが、都内に住むハシブトと三多摩地方に住むハシボソが、冬期間は仲よく明治神宮の森をネグラにして共存しているといっておられることが書いてありましたので、私の観察も間違いではなかったかもしれません。

時代は変ってつい3年程前の45年10月14日でしたが、札幌から函館に車で行く途中、午前10時頃でしたが、八雲付近の海岸で、また今年の3月25日夕方、比羅夫と俱知安の中間付近を車で通ったとき、山沿の畑の中で、いづれも伊豆松崎の場合よりもはるかに規模は小さなものでしたが、やはり円形に集合しているハシブトガラスの一群を見ました。共に偶然の集合形態ではないように見えたのですが、走っている車の中からの観察でしたのでそれ以上詳しいことはわかりませんでした。

(気象協会北海道本部長)



野鳥のきびしさ

佐藤清左衛門

私の社宅の物置の屋根裏にムクドリが巣を作り、昨年・今年と2回ヒナを育てた。私も野鳥にマンザラ興味がないわけではないので積極的な営巣援助はしないまでもできるだけ邪魔しないよう、また物置に出入りするときもあまり大きな音など立てないよう、注意して順調な巣立ちを見守っていた。物置の近くに人が近づくと特有の鳴き声でギアギア騒ぐので、家内などはまるで遠慮しながら物置に出入りしなければならぬので、どっちが主人だかわからないと一時コボしていた。

今年も数匹のヒナが孵つたらしく、昨日(6月18日)まで親鳥がせっせと餌を運んでいた。途中でのぞいて見ようと思ったが、かなり屋根の奥らしく懐中電燈を使わなければならないので驚かしてもつまらないと思って止めた。

今朝(19日)雛の鳴き声が聞えないので無事巣立ったなと思いながら物置に近づいてヒョイと屋根の下を見たら驚いた。かなり大きくなり、ウブ毛程度の毛の生えたヒナが2羽地面に落ちて死んでいた。ヒナの鳴き声から判断すると5羽くらいはいたものと推定されるので、あとの3羽くらいは無事巣立ったものと思われる。

もしネコ、ヘビなどに侵入されたとすれば死体そのままになっているはずもなく、また巣のちょうど直下にイヌをつないでいるのでこれらの侵入者は簡単に入り込むことができないだろう。これはおそらくスズメなどでよく見かける他の雛に比べて育ちが十分でないのを親鳥が見捨てたものではないだろうか。何と可愛想なことをするものだと一瞬親鳥の無情さをなげいたが、また、反面人間世界では考えられない冷徹な自然の掟のキビシさに直面したような気がして、身のひきしめる思いがした。たとえこの2羽を育てても生存競争のきびしい自然界ではとても生きて行けないと本能的に判断しての親鳥の緊急措置かも知れない。

人間世界と鳥の世界とを比べるのも甚だおかしな話であるが、子供を持つ親として、今までこの親鳥のキビシサの何分の1の厳格さをもって子供を育てたことだろうか、蝶よ花よと甘やかしすぎたことは否めない。果して人間社会の生存競争に堪えて立派に生きて行けるだろうか、文句なしに Yes といえる自信は私にはない。

(栗山町・王子製紙林業育種研究所)

野鳥の日記から

さとう実

1973年3月5日 午前

野鳥愛護会の百武 充さんの紹介で、川崎からという福沢範一郎さん夫妻がキレンジャクの鳴き声を録音とりにくる。いい塩梅に鳴いてくれた。録音の器具や操作を珍しく見る。福沢さんは野鳥を追って、九州、信州へも行き、北海道にはこんどで3回目という。

ひととおり録音をすましてお茶をのんでいたら、エサ台にキレンジャクが50ほどくる。そのうちにこしはじめて置いた窓ぎわのエサ台にも来た。——うちの中に入るかしら?と家内が窓を開けて、ガスレンジの上においたビール瓶に、割箸にさしたリンゴをたて、4人で眺めていたら、勇敢?なのが入ってきてリンゴの上にとまったので4人も驚いた。このあとヒヨドリも入ってきたが、飛びたつとき開いていない窓の方へ飛び、2・3度

ガラス窓にぶつかってから外へ行ったので、——あわてものだね、と4人で笑った。しかし、こういういたずらはいけないのかもしれない。

3月7日 朝

ベニヒワらしい(図鑑で不明)のが来る。この鳥、去年みたのは3月10日だった。そういえばキレンジャクもこしは2日おそく見た。

コウライキジ♀5だったのが、きょうは1ふえて6となる。この新顔、前の連中にこづかれて逃げたりする。5が弓揚げたあとも居残って20分もたべていた。

3月8日 午前

けさはまたコウライキジの♂新しいのが1きて3とな

る。3羽となるとさすがに見事。

ハイタカ来る。これが来てカラ類はとんでたが、あとからスズメも飛び、またヒヨドリは高い枝でピーピーなっている。

去年はこうではなかった。皆ジツとしていた。たまたまシジュウカラがチョコチョコ飛んだくらいで。コウライキジの♀などはエサ場の雪の壁に向ったまま、4、5分もジツとしていたものだ。

キレンジャク10羽ばかり飛んできて、ハイタカはそのままでいるが、頸は始終くるくる廻している。頸は90度廻る。スズメも元気にとんでいる。

シメがきて窓ぎわのエサをたべた。ミヤマカケスも4羽きた。ヤマゲラもきて、しばらく脂をつつく。これは去年のより美しいようだ。と、ハイタカが鳥のそばの藪にいたスズメを目がけて飛び立った。ハツとしてみていたが近くの水道局の公宅の上を飛んで見えなくなった。

3月9日 朝7時

キレンジャク、ヤマゲラ♂、ヒヨドリ、スズメたちが来ている。ゆうべ酒屋さんが店で売っているパンのくずをたくさん持ってきてくれたのでありがたい。

9時10分、スズメ50ほどいる。ヤマゲラまだいる。2時間にもなる。

9時15分、ハシブトガラ、シジュウカラいる。ヤマゲラはもういない。

9時30分、コウライキジ♀6羽エサ箱にくる。ことは、雪の上にエワトリにやるようなエサ箱を置いた。これは野鳥愛護会の新年懇談会するとき、出席したご婦人からきたのでまねたもの。隣の奥さんが表にいたので家内が台所によんで、6羽のコウライキジを見せたら驚いていた。

38分、シジュウカラ、アカゲラ♂、キレンジャク、ヒヨドリ、ツグミ、スズメ2・30、エサ台やその近くにいる。

41分、ハシブトガラがリンゴをつつく。

43分、コウライキジ♀2羽がエサ台2号と一緒に乗っている。3羽はエサ箱に。きていない1羽は新顔か。

49分、6羽そろそろ。2号に1、4号に2、5号に1、あとの2はエサ箱とエサ台の下に。

55分、キレンジャク窓ぎわのエサ台にいっぱい。100羽以上。ツグミはエサ箱をつついて。コウライキジ6はもう戻った。

58分、コウライキジ♂1、エサ箱にくる。

11時15分、エサ箱のコウライキジ♂が窓からみえる藪のところへ行き、そこに佇ついる。窓からパンを投げてやったら、藪の中から別の♂が1羽出てきてこれを食べた。前の♂はそのまま。

30分、キレンジャクが巣箱をかけてある木にたくさん

いるので、また窓からパンを投げた。雪の上に。間もなく14・5羽が降りてきてそれをつつく。木にはまだ10羽ほどいる。

流し台の正面向うの藪にコウライキジ♀6がたむろして、もそもそしている。

54分、アカゲラ♂1羽、エサ台3号の脂にくる。

57分、キレンジャク10羽以上、応接間の窓の外のエサ台に。

12時27分、コウライキジ♀4羽がエサ箱に、1羽は藪の近くに、あとの1羽は♂2羽と一緒に白樺の奥(台所から10メートルほど)の木の枝にとまっている。

午後1時40分、アカゲラ♂1羽きている。

2時、コウライキジ♂1羽(新顔のらしい)まど下に投げておいたパンを食べにくる。雪でエサ場に行けないとき、または不精をして、ことしは窓から雪の上にエサを投げてやることを覚えた。

まど際のエサ台にハシブトガラ1くる。

エサ箱にスズメ10ほど。ヒヨドリ1も一緒。

3月10日 朝

コウライキジ♀3♂2、キレンジャク、ヒヨドリ、ムクドリ、ヤマゲラ、シジュウカラ、スズメ、アカゲラ♂など来たり、帰ったり。

9時10分、ミヤマカケス1くる。

20分、窓からパンを投げたら、間もなくコウライキジ♀6羽、♂1羽くる。

40分、コウライキジ♂2(1は新顔のらしい)と、あとから♀2(黒とチビとあだ名をつけた)が台所の窓下にくる。黒が大きなパンを拾ったら、チビが追う。雪原をあちこち追ひ追われしていたら、向うの藪から♀3と♂1が出てきて、黒とチビのあとを追いかける。まるで運動会のかけっこのように雪原をぐるぐる廻る。ちょっと見ものだった。

この間キレンジャク30ばかり。スズメはなんぼいるかさかんにコーラス。ヤマゲラ♂はさっきからせせと1号の脂をつつき。向うの枝にはヒヨドリ1、ツグミ1、運動会の選手たちは皆藪へ入ってしまった。

11時1分、コウライキジのチビ、エサ箱で食べている。そこに黒もくる。雪が少し前から降っている。

5分、ベニヒワ?しばらくぶりにくる。

8分、ミヤマカケス5来る。つづいてヤマゲラ♂が1号の脂に。この台にカケスがきてヤマゲラをのぞくと、ヤマゲラは雨覆羽を拡げてカケスをおどした。

(札幌市西岡在住)

鳥の記録 (昭和48年春～夏)

◆ 珍しい鳥の記録

◇ クロサギ

函館市函館山の岩礁地帯で5月13日に森口和明さんによって2羽観察され、日本鳥学会に報告されました。

クロサギは暖い地方の海岸に住む小型のサギで、黒いタイプと白いタイプがあります。日本では主として関東地方以西で見られますが、北海道からは今回が最初の記録になります。(写真1 森口さん撮影)



◇ アネハヅル

わが国では迷鳥として稀に記録されるにすぎないアネハヅルが1羽、5月27日から6月3日まで稚内市富磯で観察され、新聞等でも報道されました。(写真2 宗谷支庁林務課の石川義則さん撮影)

◇ シラサギ類各地に飛来

北海道ではふつうはみられないシラサギのたよりが今年の春には各地から聞かれました。事務局に届いたものは次のとおりで、いずれも5月中に観察されています。

- チュウダイサギ 苫小牧市ウトナイ湖宮崎政寛さんから
- チュウサギ 礼文島久種湖 1羽 梅木賢俊さんから
- アマサギ 網走市濤沸湖 1羽 森 信也さんから
- 新得町上佐幌 1羽 (北海道新聞5.23付)
- えりも町 1羽 袁輪 新さんから
- 七飯町大沼 2羽 森口和明さんから

(写真3 大沼のアマサギ 森口和明さん撮影)



◇ ヤツガシラ

4月22日に浦河町で高尾正克さんが、4月 日に利尻島で梅木賢俊さんがそれぞれ1羽を観察したと報告がありました。また同じころ小清水町でも観察されているということです。

◆ 夏鳥の初認

◇ イソシギ

- 4. 21 札幌市白石北郷 新宮康生
- 4. 21 " 真駒内 新妻 博
- 4. 22 美唄市光珠内 藤巻裕蔵
- 4. 24 札幌市篠路 松岡 茂・中尾弘志
- 4. 25 上士幌町糠平 川辺百樹
- 5. 5 恵庭市 小山政弘

◇ オオジシギ

- 4. 11 江別市大麻 百武 充
- 4. 19 美唄市光珠内 藤巻裕蔵
- 4. 20 石狩町花畔 松岡・中尾

◇ キジバト

- 3. 28 大野町 森口和明
- 3. 30 江別市大麻 百武 充
- 3. 31 美唄市光珠内 藤巻裕蔵
- 4. 8 札幌市白石北郷 新宮康生

- 4. 8 " 真駒内 新妻 博
- 4. 12 上士幌町糠平 川辺百樹

◇ カッコウ

- 5. 16 石狩町花畔 松岡・中尾
- 5. 20 美唄市光珠内 藤巻裕蔵
- 5. 24 札幌市真駒内 新妻 博
- 5. 24 江別市大麻 百武 充
- 5. 25 札幌市手穂 舟橋直子
- 5. 25 " 界川 平井さち子
- 5. 27 上士幌町糠平 川辺百樹

◇ ツツドリ

- 5. 7 美唄市光珠内 上条一昭
- 5. 8 札幌市界川 平井さち子
- 5. 14 苫小牧市糸井 村田信義
- 5. 15 上士幌町糠平 川辺百樹

◇ ホトトギス

- 5. 25 江別市大麻 中畑 勉

- 6. 6 " 野幌 前田順子

◇ ハリオアマツバメ

- 5. 27 札幌市真駒内 新妻 博
- 6. 8 上士幌町糠平 川辺百樹
- 6. 12 札幌市北大構内 山崎治行

◇ アマツバメ

- 4. 26 石狩町花畔 松岡・中尾
- 5. 5 札幌市真駒内 新妻 博
- 6. 1 上士幌町糠平 川辺百樹

◇ アリスイ

- 4. 21 札幌市真駒内 新妻 博
- 4. 21 美唄市光珠内 藤巻裕蔵
- 4. 23 石狩町花畔 松岡・中尾
- 4. 28 恵庭市 小山政弘

◇ ヒバリ

- 3. 25 (姿) 江別市大麻 百武 充
- 3. 31 (囀り) " 門崎和子

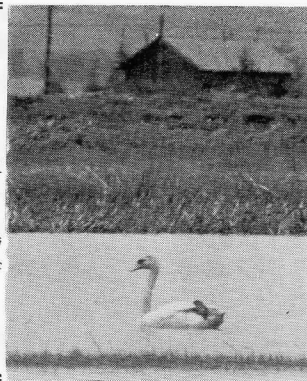
3. 31 札幌市白石北郷 新宮康生
 4. 1 " 東札幌 野口正男
 4. 1 美唄市 藤巻裕蔵
 4. 3 札幌市真駒内 新妻 博
 4. 4 別海町泉川 三浦二郎
- ◇ツバメ
 4. 3 七飯町 森口和明
 4. 20 石狩町花畔 松岡・中尾
- ◇イワツバメ
 4. 13 札幌市苗穂 新宮康生
 4. 18 " 真駒内 新妻 博
 4. 19 愛別町 山田良造
 4. 20 札幌市宮ノ森 山崎治行
 4. 21 上土幌町糠平 川辺百樹
- ◇ハクセキレイ
 3. 27 札幌市白石北郷 新宮康生
 4. 2 " 真駒内 新妻 博
 4. 4 別海町泉川 三浦二郎
 4. 5 札幌市東札幌 野口正男
- ◇ビンズイ
 5. 14 札幌市手稲 舟橋直子
 5. 16 " 真駒内 新妻 博
 5. 24 上土幌町糠平 川辺百樹
- ◇モズ
 4. 6 札幌市白石北郷 新宮康生
 4. 7 江別市野幌 新妻 博
 4. 9 " 大麻 百武 充
 4. 10 美唄市光珠内 藤巻裕蔵
 4. 11 上土幌町糠平 川辺百樹
 4. 13 石狩町花畔 松岡・中尾
- ◇コルリ
 5. 9 札幌市真駒内 新妻 博
 5. 17 上土幌町糠平 川辺百樹
- ◇ノビタキ
 4. 8 苫小牧市ウトナイ 山崎治行
 4. 10 上土幌町糠平 川辺百樹
 4. 13 石狩町 松岡・中尾
 4. 16 恵庭市 小山政弘
- ◇トラツグミ
 4. 26 上土幌町糠平 川辺百樹
 4. 29 札幌市真駒内 新妻 博
- ◇クロツグミ
 4. 20 札幌市宮ノ森 山崎治行
 4. 25 美唄市光珠内 藤巻裕蔵
 4. 26 江別市大麻 中畑 勉
 4. 28 恵庭市 小山政弘
 4. 29 札幌市真駒内 新妻 博
5. 3 " 手稲 舟橋直子
 ◇アカハラ
 4. 22 札幌市手稲 舟橋直子
 4. 22 石狩町花畔 松岡・中尾
 4. 24 上土幌町糠平 川辺百樹
 4. 26 江別市大麻 中畑 勉
 4. 28 恵庭市 小山政弘
 4. 29 札幌市真駒内 新妻 博
- ◇ヤブサメ
 4. 22 函館市函館山 新妻 博
 4. 29 札幌市真駒内 "
5. 12 上土幌町糠平 川辺百樹
- ◇ウゲイス
 4. 21 石狩町花畔 松岡・中尾
 4. 22 札幌市手稲 舟橋直子
 5. 4 上土幌町糠平 川辺百樹
- ◇エゾセンニユウ
 5. 28 石狩町花畔 松岡・中尾
 5. 29 江別市大麻 百武 充
- ◇コヨシキリ
 5. 24 札幌市白石北郷 新宮康生
 6. 9 石狩町花畔 松岡・中尾
 6. 10 札幌市手稲 舟橋直子
- ◇オオヨシキリ
 5. 12 札幌市発寒 山崎治行
 5. 16 " 白石北郷 新宮康生
 5. 30 石狩町花畔 松岡・中尾
- ◇センダイムシクイ
 4. 22 函館市函館山 新妻 博
 5. 4 上土幌町糠平 川辺百樹
 5. 5 札幌市真駒内 新妻 博
 5. 5 " 円山公園 山崎治行
 5. 7 石狩町花畔 松岡・中尾
 5. 11 江別市西野幌 中畑 勉
 5. 11 札幌市西岡 さとう実
- ◇キビタキ
 5. 5 恵庭市 小山政弘
 5. 8 上土幌町糠平 川辺百樹
 5. 11 江別市西野幌 中畑 勉
 5. 14 札幌市北大植物園 山崎治行
 5. 15 " 真駒内 新妻 博
- ◇オオルリ
 4. 29 札幌市真駒内 新妻 博
 5. 1 " 西岡 さとう実
 5. 2 上土幌町糠平 川辺百樹
 5. 3 石狩町花畔 松岡・中尾
- ◇ホオジロ
 4. 2 札幌市白石北郷 新宮康生
 4. 6 上土幌町糠平 川辺百樹
 4. 15 美唄市大富 藤巻裕蔵
- ◇ホオアカ
 4. 22 札幌市白石北郷 新宮康生
 4. 23 石狩町花畔 松岡・中尾
 4. 25 美唄市 藤巻裕蔵
 5. 5 札幌市真駒内 新妻 博
- ◇アオジ
 4. 15 石狩町花畔 松岡・中尾
 4. 15 美唄市大宮 藤巻裕蔵
 4. 20 札幌市宮ノ森 山崎治行
 4. 21 " 真駒内 新妻 博
 4. 21 上土幌町糠平 川辺百樹
 4. 22 恵庭市 小山政弘
 4. 28 江別市西野幌 中畑 勉
 4. 29 札幌市白石北郷 新宮康生
- ◇カワラヒワ
 3. 30 美唄市光珠内 藤巻裕蔵
 3. 31 札幌市白石北郷 新宮康生
 4. 1 " 真駒内 新妻 博
 4. 3 札幌市東札幌 野口正男
 4. 6 江別市西野幌 村野紀雄
 4. 8 札幌市北3西16 小坂晃理
 4. 13 上土幌町糠平 川辺百樹
- ◇イカル
 5. 5 恵庭市 小山政弘
 5. 15 札幌市真駒内 新妻 博
 5. 25 石狩町花畔 松岡・中尾
- ◇シメ
 3. 30 美唄市光珠内 藤巻裕蔵
 4. 13 江別市大麻 百武 充
- ◆冬鳥の終認
- ◇ツグミ
 4. 27 上土幌町糠平 川辺百樹
 5. 15 札幌市発寒 山崎治行
 5. 29 石狩町花畔 松岡・中尾
- ◇キレンジャク
 5. 5 札幌市白石北郷 新宮康生
 5. 9 " 西岡 さとう実
- ◇カンシラダカ
 5. 14 上土幌町糠平 川辺百樹
 5. 17 石狩町花畔 松岡・中尾
- ◇ベニヒワ
 4. 3 札幌市白石北郷 新宮康生

美唄市でコブハクチョウ

5月22日と6月10日、美唄市西美唄にある親子沼でコブハクチョウ1羽を観察した。

沼は直径100mほどで、周囲は水田となっている。コブハクチョウは頭を背につっこんだままで、沼の中央部にいた。近寄っても、まったく人間を警戒せず、手をたたくとやっとな首を出す程のんびりとしていた。頭部は灰色で、完全な成鳥ではなかった。人間を警戒しないところを見ると、どこかで飼育中のものが逃げだしたようである。なお、この沼にはカルガモ、シマアジ、カイツブリがいた。

(藤巻裕蔵)



野幌森林公園を歩きましょう

◇日時 10月7日、10月28日、11月18日、12月2日を目標にしていますが、変更するかもしれません。

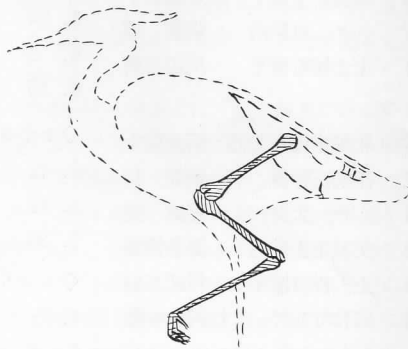
◇集合時間・場所等については、ご連絡くださる方にそのつどおしらせします。同行される方は上の日の少し前に下記あてにお確かめください。

◇連絡先 百武 充 TEL江別(01138)-6-4008

◇その他 歩く距離は各日とも10~12キロくらい。朝9時ごろ集まり、午後3時ごろ解散する予定です。

クイズの答 (問題は6ページ)

まず図をみて下さい。鳥の肢の「ひざ」にあたる部分は体の中にあって見えません。普通、羽毛の外に出ているのは「すね」から下の部分です。したがって、肢のまがる部分は、「かかと」に相当し、後にまがります。問題の図で、左肢が前にまがっていますが、これを後にまがれば正解です。



今月の表紙 チュウアジサシ

アジサシはカモメのなかまですが、カモメよりいっそうスマートな形をしています。尾がフォーク状になっているのですぐ見分けられます。

チュウアジサシは、北海道でふつうにみることのできる唯一のアジサシです。北極圏の周囲で繁殖し、春と初秋に日本を通過してゆきます。川口や大きな湖の上を軽快に飛んでいるのがよく見られます。以前は単にアジサシと呼ばれていましたが、最近改称されました。

《事務局だより》

☆ 7月の末に富良野岳に登って来ました。ルリビタキやノゴマの声や姿もさることながら、山の斜面を埋めるウサギギクやエゾキンバイソウの黄色い花、ハクサンイチゲやチングルマの白い花、崩壊地にひっそりと咲くエゾルリソウに、久しぶりに心を洗われる思いがしました。山の鳥と花と空気の記憶をたいせつにしまいこんで札幌に帰ってきたのでした。

☆ 今号は、夏鳥の初認等の記録を2ページにわたってまとめてみました。毎年お便りをくださる方が多くなって、今年はずいに1ページでは間に合わなくなり、一部内容を省略せざるをえなくなりました。

☆ 7月にお送りしたニュースでおしらせしたとおりついに会費が値上げされました。札幌から遠く離れた地方にお住いで、探鳥会等の行事に参加する機会が少ない方にも高すぎる会費にならぬよう、事務局としても一層会報の充実等に努力したいと考えています。どうぞご理解をくださいますように。また、会の運営などについてのご意見をぜひお寄せいただきたいものです。

☆ 16号の原稿メ切りは10月5日といたします。送りは事務局(道庁自然保護課内:札幌市中央区北3条西6丁目、TEL 231-4111内線3895)まで。なおなるべく横書きでおねがいします。

☆ ムクドリやヒバリ、カワラヒワのいなくなるのがいつもの年より少し早いような気がします。